



數道通鑑  
 釋教之總



遠 13  
 1719  
 2



13  
1719  
2

艶道通鑑卷之二

釋教之志目錄

- 一 慈蕃渴仰乃殿
- 二 小野小町の殿 附 僧正遍昭の事
- 三 智光法師の殿
- 四 朝勸上人乃殿
- 五 書写性空上人の殿
- 六 清水法師の殿
- 七 道明法師乃殿 附 和泉式部の事
- 八 慈惠僧正の殿 附 吉水和尚の事



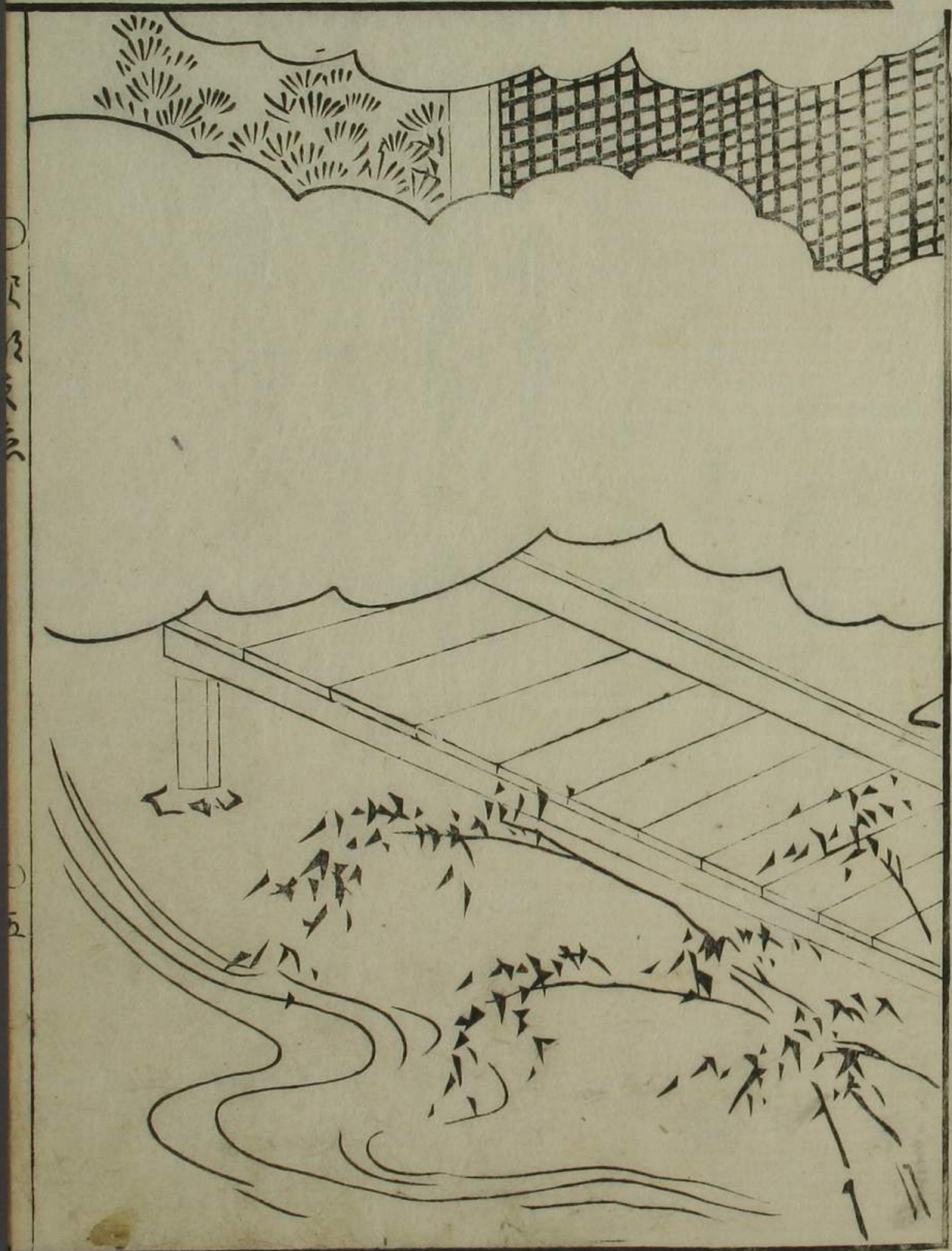
○ 釈教之志 目錄



○新考之  
私をみせて善悪明らるるに。悪くあつてはむらさき。  
善くあらばむらさき。是表表らるゆへなり。今格の四とみ  
たてり。あて表表らるにむらさき。尚分悪をさへむらさき。文をさへむ  
智恵と磨く。心性の實と悟らるゆへ。一身のおぼろけ  
し用也。そのれが智恵乃一人。とてん事とさへ。智恵と  
あつてはむらさき。人を惑はして。そのれが身をさへむらさき。  
去程。善と非と。外側。悪を悟らる。外なりにして。  
とてん事をさへむらさき。とてん事とさへ。むらさき。むらさき。  
ゆへに。むらさき。夫白糸をさへむらさき。黄は。黒く。黒く  
ゆへに。むらさき。道の巻と教へ。其た。むらさき。むらさき。

○新考之  
むらさき。むらさきの朱を奪まぬ。むらさき。後者。むらさき。むらさき。  
大徳乃大智。婦女の仁と。是のゆへ。おぼろけ。あつて。善悪  
をさへむらさき。肉眼のまらさき。公道達徳。はむらさき。善  
むらさき。善。本。むらさき。末。むらさき。むらさき。大。本。と。さへ。て  
末をむらさき。と。さへ。むらさき。むらさき。善。と。さへ。むらさき。と。  
と。皆人欲。むらさき。私。むらさき。あつて。眼。の。利。を。得。る。事。と。  
分別。と。さへ。善。あ。むらさき。得。と。さへ。むらさき。と。道。と。さへ。むらさき。と。邪  
かり。邪。より。利。を。得。むらさき。何。ぞ。子。孫。の。後。家。あ。むらさき。又。今。生。一  
旦。の。業。あ。むらさき。善。の。苦。報。を。むらさき。むらさき。や。大。善。の。天。の  
か。と。さへ。むらさき。大。名。と。さへ。むらさき。家。と。さへ。むらさき。長。者。れ。と。さへ。むらさき。分。別





















行は日顛倒とせば獄卒杖とす。衆記とせば聖衆  
蓮華をかきく。いまも肉身とてなれど終に迷ふまじき  
あもわらば靈性そよりり。悟るふかんとおぼゆるん。  
昔はほろしとわらう。まをぬく。悟も明らふ。實とぬて  
してとらふかたうた。今時の僧徒わすて迷ひらう。悟も  
そんをけ。四つとて様々。とらふ清と衣衣衣衣。衣衣  
氷のどん。氷霜をぬて。いつの清も来わたん。賊とてんあ  
盗をせば。載割が。さす。み。帰ら。じ。と。わ。れ。い。空。也。乃  
教。一。茶。筍。賣。毛。坊。を。と。わ。ら。ど。じ。之。米。の。ぬ。ん。が。い。じ。び  
ふ。み。ら。ん。と。ら。む。わ。や。ま。を。ひ。ら。ふ。け。ら。る。ま。ま。と。又。信。練

して道より入る。鈴と泣く。耳はぬく。信より。味を  
衆とわらふ。よう。

五

書字の性空上人は。法は法。誦の功。積多して。此身は。六根  
清淨を得。多し。或時の。親会。れ。窓。法。佛の。摩。頂。と  
うけ。傳。説。の。を。も。衆。の。本。願。と。許。す。い。と。さ。う。あ。ふ  
熟。さ。い。い。い。い。番。も。出。せ。乃。也。利。さ。る。れ。い。今。も。仏。茶。の  
世。に。ま。う。て。う。業。熟。乃。名。生。成。報。い。あ。つ。ん。允。ま。い。眼。さ。め  
て。ん。年。の。じ。我。ち。根。の。清。と。と。り。て。何。と。ぞ。新。規。乃  
さ。る。容。さ。り。て。直。よ。は。身。の。善。賢。并。と。お。も。ま。ん。と。朝。夕  
彩。ら。り。い。或。時。の。ま。ね。よ。生。身。の。善。賢。と。お。ま。ん。と。さ。ら。い。







体ヤコトは衣あそと油あぶらつゝて二布ふたのに襟けりと持もち犯ふ用もち遮さへハ何なにも  
 海うみけんと下した書かき入いるふ。今いまく身みを正ただしく公こう磨らくて固かため  
 約やくらわぬ。只ただ身みに盗ぬすては吐へき性じやう穢たいらと棄すて棄すてややくゆへる  
 を立た固かたてば世よのを姓せいとなりの也なり。寒かん山ざん捨すて得とくし候をとらば  
 四よ足あしかぐく青あお毛もうと名なをま下くだす。一ひと向むかを俗とらる者ハそのまごらう  
 科かのまはを弘ひろめて人の教をまらず。不ふ付つ休きゆうあるは盗ぬすの中なかれ  
 盗ぬすかり。淺せん季きの濁にごせるいは禁きん戒かいも破られ。佛ぶつ制せいもそひ  
 へらちてなら同どうさうならねぬ中ちゆうに和師わしの授ハ守りて人のそ  
 ちうと恥せとはべりとさしをやめく。佛ぶつのまを人のゆら  
 せしをまらんたらようくー

六

唐たうは武ぶは師し。鬼きははをまらずて人をまらず。そのまをつてまらず  
 賊ぞくとらる。虎ことみをまらずて追おひたはらすは身みをまらずとられどまらず  
 乃すなはち虎とみをまらずわらず。醉すいねは衣えをまらずけり外がい道だう佛ぶつをまらずとられど  
 ちうと恥せとはべりとさしをやめく。佛ぶつのまを人のゆら  
 せしをまらんたらようくー

入てわづらうの。婢始るる女希の。是も同じく様ざりて。此れよ  
 まさしくいふにけり。不審目も同やんか。合に。彼女の面慚げも  
 顔打つて。あけて。慥笑ふ。今も。あつた。いづれ。あつた。あつた。  
 嵐も。うの。あつた。いづれ。あつた。あつた。あつた。あつた。  
 あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。  
 まさしく。彼侍の。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。  
 ら。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。  
 出。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。  
 顛肺に。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。  
 う。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。

物との。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。  
 乃。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。  
 身。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。  
 水。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。  
 燈。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。  
 つ。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。  
 一。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。  
 新。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。  
 悔。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。  
 一。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。















水戸はらりけふらの返事ありいまだらふまふりしに  
せめてわづらひて

しるすれどもさうせうしに袖ぬきさ

我身もいさよまふりよの中

とつて又身よはさそせうけりぬさういわれとをたつさく  
てたんと書くと又う

髪さらりしうらまはるる

かぶつされといさうらるる

し書くとわづらひとさうふ添とさうらりく袖うけり  
ゆりさやうの遊人さんとははらあんと人よ別添をせし

いむがんとさそさうめ其ををてさされて一節はせり  
ををかきんいよもみろくれ宿若いわけせり貯ち戒り  
どものはに水い潤いこれらるるをねり又雪よの夜夜  
あはとさし曉よの明さびと涙をながはしと語りしを乃終り  
お終りおまのぬく指をうららるるを前へ終りて雨やけり  
ほとく西ののどははは縁記といふものにて書きて  
の宴会よわだ此ののとのとて感よひらけてお女が  
え我名れ妙を終りえん其代までいあられ里いも終り  
あんど宿けりるるを終りてりあを借るとまもやしく  
宿りる人よはるる如し末の代れおねり六部り遊人なり



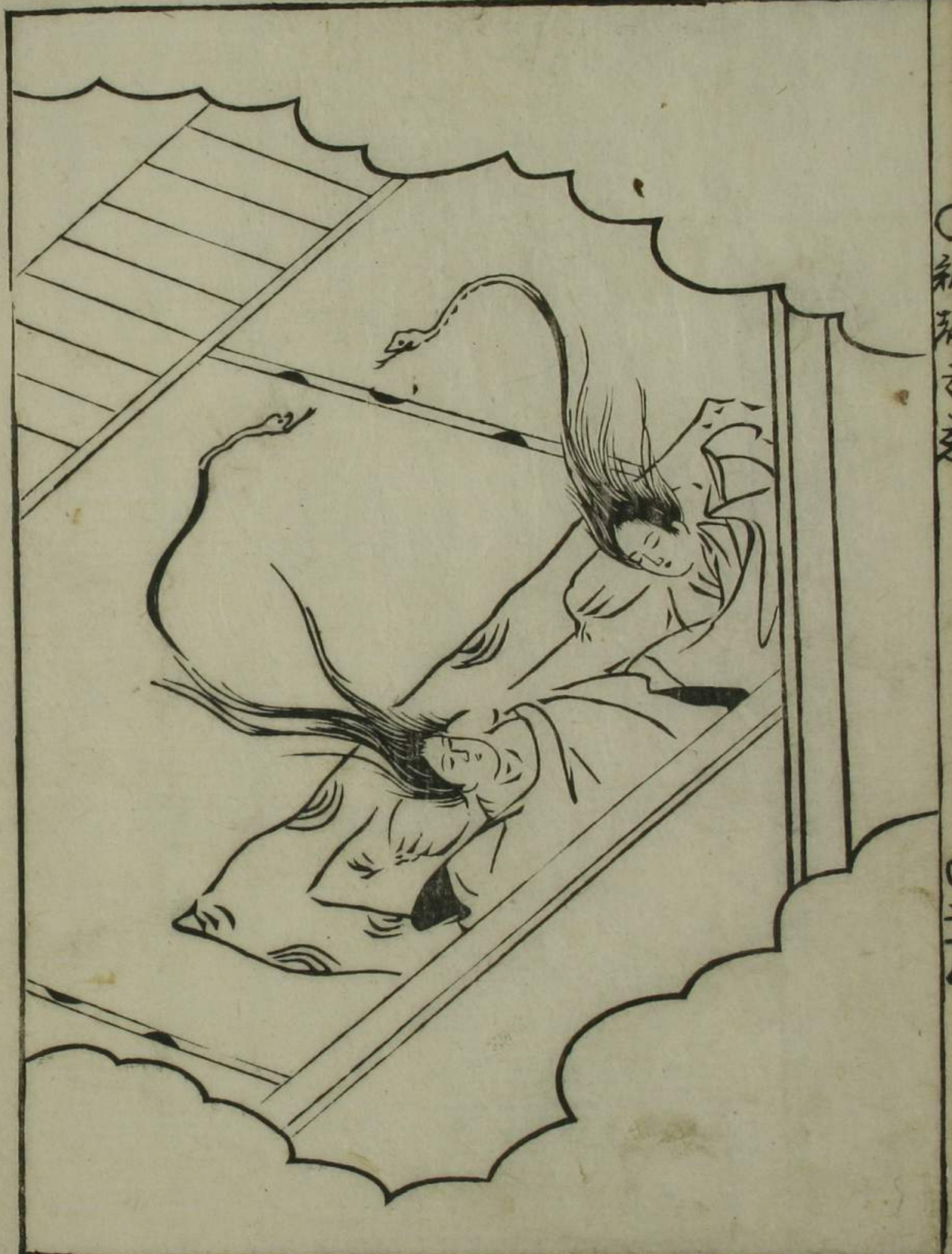




名はくわんまの件ははうて。物言結語がうのまん。後神  
業といひ足をもじ。聖世神の因位は基き。伯夷が旧徳と  
まれ。まのまのまのま

奇なる門者ねが子。滝の暗影とてあまのい。ふね飯の侍  
して。六波羅指の仕中男。髪をうすうはなまう。烏帽子の  
まはしちやんくや。まのまのまのま。何をさえても二番目  
みらぬが。親に乃想然子。あうのいそ。願の中まや。ふね飯の  
姉妹。それゆ日毎の仕使。雨はつけ風よつきて。妹姉うめ  
ひ。何のうれも滝は足をもどけ。はら。男よりうけよ。ふね  
はからぬ。中宮よまはまの女。婦女官達。おくれうのい。は

あの男さうてえん。或母は仕使の道に。横あつて。まの  
り。滝は友部とて。園うすて。あひの。おの。あひの。あひの。  
や。まの。まの。まの。まの。まの。まの。まの。まの。まの。  
小宿と求く。まの。まの。まの。まの。まの。まの。まの。まの。  
まの。まの。まの。まの。まの。まの。まの。まの。まの。まの。  
仕るんども。まの。まの。まの。まの。まの。まの。まの。まの。  
親の面をも。まの。まの。まの。まの。まの。まの。まの。まの。  
しける。西王母。まの。まの。まの。まの。まの。まの。まの。まの。  
まの。まの。まの。まの。まの。まの。まの。まの。まの。まの。  
まの。まの。まの。まの。まの。まの。まの。まの。まの。まの。



新編之巻

二巻



かへりて國をめぐり、滝入道一首の言をききしにけり

さかまたていねしうとともわらさう

はしりのみらう入そう秋しき

横笛が返来し

うらとてと何ううらさ梓う

いしひしきをさしねと

うのら天降といふあはれき。滝口の古小神ると。流し仕  
まきさう。程程と終りてしとや

ほとく。茂村が世のあきの聲にまんとまひしとひし  
儘よしとまづまの娘と人まらうとさう。時ねがうらふよ

此の如回丹年。まに魂とまをう時とんく何うやんや。是うとい  
時ねと。其ねとあのみや。んあうぬ娘らう。横笛と推し  
り。是の平あ物倍り作者。文に流て義を失い物ら。世に乃  
下知は後まは。横笛も流うはとらふよ。親と親い横笛  
をさかまはよくさゆ。其をさ推しゆ。まも確ぬるをまかぬ。  
彼形の色に迷うとまは。は。横笛う娘娘の。さう面座て  
雲のあ神の洞とまは。のののの細細とまは。んよ。ん  
うの大道も失うとまは。ん。義と信。名は倍し。ま言り。  
後の昔程よあつけら。かやうれお終りうら。ん。ん。ん。ん  
一遍と人の何れ何れと。倍りり。家名ゆら。あて。將軍





色づくはの妻<sup>てみ</sup>り男<sup>らう</sup>をねらるゝをりて。朝夕<sup>あさゆふ</sup>敵<sup>たかひ</sup>まはして。いさり  
 そじく氣色<sup>きしき</sup>をわけきつ。其<sup>その</sup>中<sup>ちゆう</sup>をねまふ可<sup>かな</sup>能<sup>ね</sup>はるる。を二  
 よひきざれ。さうらも何<sup>なに</sup>も驚<sup>おどろ</sup>うて。たたねのよおみ拵<sup>たて</sup>きん。其<sup>その</sup>名  
 と山<sup>やま</sup>菜<sup>な</sup>田<sup>た</sup>菊<sup>く</sup>と。いづるもわう。病<sup>やまひ</sup>何<sup>なに</sup>も袖<sup>そで</sup>と袂<sup>たもと</sup>と。いづるも  
 いろらるぞほまら。糸<sup>いと</sup>竹<sup>たけ</sup>の遊<sup>あそ</sup>び妙<sup>たぎ</sup>めて。夜<sup>よ</sup>の宵<sup>よひ</sup>めりの信<sup>しん</sup>ぶ  
 は宵<sup>よひ</sup>とくも寝<sup>ね</sup>まら。朝<sup>あした</sup>の昼<sup>ひる</sup>まで敷<sup>ふ</sup>きより。別<sup>わか</sup>れはるるいづるも。  
 何<sup>なに</sup>れらるる事<sup>こと</sup>ありしに。或<sup>ある</sup>時<sup>とき</sup>般<sup>ぱん</sup>の介<sup>け</sup>つとあて。まてゆきまふ  
 を。二人<sup>ふにん</sup>のさし入<sup>い</sup>りぬる。花<sup>はな</sup>合<sup>あひ</sup>をたういぬれ。この打<sup>うち</sup>帯<sup>おび</sup>帯<sup>おび</sup>あつて  
 一回<sup>ひとま</sup>をうくるいふ。女<sup>にん</sup>のおうそをさけいて。いづるも。いづるも  
 くれい。わや。さけいのをたに。花<sup>はな</sup>合<sup>あひ</sup>の二人<sup>ふにん</sup>の髪<sup>かみ</sup>とさう。蛇<sup>へび</sup>と

ま<sup>ま</sup>は。びづるをら。冷<sup>ひや</sup>わ。其<sup>その</sup>度<sup>たび</sup>ど。二人<sup>ふにん</sup>の妻<sup>つま</sup>遍<sup>へん</sup>所<sup>しよ</sup>より汗<sup>あせ</sup>  
 をまじ。くねま。髪<sup>かみ</sup>をき。ゆら。と。井<sup>い</sup>ら。まは。く。と。後<sup>あと</sup>に  
 外面<sup>がめん</sup>の井<sup>い</sup>ら。内<sup>うち</sup>の夜<sup>よ</sup>奴<sup>に</sup>の角<sup>つの</sup>あり。佛<sup>ぶつ</sup>の也<sup>や</sup>教<sup>けう</sup>育<sup>いく</sup>せ。を  
 善<sup>ぜん</sup>程<sup>てい</sup>の系<sup>けい</sup>織<sup>し</sup>とて。髪<sup>かみ</sup>とゆら。身<sup>み</sup>と。ま。い。不<sup>ふ</sup>任<sup>にん</sup>の紅<sup>こう</sup>葉<sup>え</sup>移<sup>うつ</sup>り。  
 懸<sup>く</sup>の神<sup>かみ</sup>意<sup>い</sup>又<sup>また</sup>けい。一<sup>ひと</sup>遍<sup>へん</sup>上人<sup>じゆんじん</sup>と作<sup>さく</sup>れ。末<sup>すえ</sup>世<sup>せ</sup>の奇<sup>き</sup>特<sup>とく</sup>と。か。  
 二人<sup>ふにん</sup>の妻<sup>つま</sup>も衆<sup>しゆ</sup>とね。尼<sup>あま</sup>と。あて。念<sup>ねん</sup>心<sup>しん</sup>は。け。あ。ま。と。あ。う。や  
 何<sup>なに</sup>と。地<sup>ち</sup>のよ。て。倒<sup>たふ</sup>して。地<sup>ち</sup>より。と。ま。色<sup>しき</sup>欲<sup>よく</sup>の。わ。で。なる。あ。ひ。  
 たの。ま。ま。り。て。哀<sup>あは</sup>情<sup>じやう</sup>と。多<sup>おほ</sup>く。陰<sup>いん</sup>中<sup>ちゆう</sup>の。暗<sup>くら</sup>く。と。あ。う。や。地<sup>ち</sup>と  
 めて。念<sup>ねん</sup>心<sup>しん</sup>と。あ。う。あ。ま。宿<sup>しゆく</sup>世<sup>せ</sup>の。苦<sup>く</sup>練<sup>れん</sup>の。ま。ま。と。ま。  
 折<sup>ま</sup>ら。う。や。わ。ん。女<sup>にん</sup>の。性<sup>せい</sup>曲<sup>まが</sup>と。僻<sup>ひが</sup>ら。る。あ。ま。う。り。の。男<sup>おとこ</sup>れ。終<sup>しま</sup>り

温純なる徳を以て。さうぞらざらんが如何ぞ。道に入づれば人を  
 入る。我も真なる。是ぞ煩惱即菩提といふは。一  
 蛇を懐くを公ぞさうべ。中流外を也。砂を嚙むは肉と  
 用ゆる科は。是心公に。執着を捨て。境界の亦るに  
 ゆるするがより。教し奉る。出家の思念念も。見  
 疑のころと除く。病と念。は命と持。おろして。守り奉る。小  
 わだ。右件の法。師より。名徳を。お。妻。公。等。して。入  
 色を以て。後乃。媒。と。其。較。多。一。李。徳。を。子。ハ。和。細。乃。聖  
 人。と。は。い。ま。い。伴。は。る。初。の。功。と。立。ま。し。け。力。を。さ。う。五。十。衆  
 よ。是。心。公。の。由。一。世。に。人。れ。け。子。わ。り。の。深。る。ま。り。と。し。ま。さ。う。又

菅魚の神。本。如。文。道。の。天。祖。其。人。神。と。云。ふ。れ。は。せ。り。ま。も。世。二  
 人。れ。老。を。あ。り。の。恥。と。あ。り。と。ま。さ。う。冬。無。斯。の。化。を。後。も。始。り。と。て  
 末。の。り。ま。と。好。し。又。樂。で。淫。せ。ば。と。り。も。南。離。の。お。と。く。睡。れ。と。志  
 り。さ。る。の。わ。ど。ら。破。戒。の。比。丘。乃。地。獄。と。云。ふ。と。從。ら。ぬ。扱。は。る  
 一。か。は。と。滅。は。あ。り。放。埒。さ。う。地。獄。小。入。り。矣。れ。と。也。義。母  
 依。て。言。は。よ。と。い。は。れ。釈。が。れ。の。ゆ。き。と。い。ふ。必。と。く。は。と。れ。ま。い  
 ぐ。次。正。法。一。戒。も。持。た。ず。若。戒。も。破。ら。る。と。い。ふ。何。し。て  
 ろ。つ。と。あ。そ。び。ま。い  
 又。水。弘。安。の。日。蓮。師。也。四。箇。の。名。言。と。立。て。法。家。と。折。伏。し  
 ろ。一。不。信。念。伴。を。同。禪。天。魔。直。言。亡。國。津。國。賊。と。是。日。蓮。師

乃惡口いさはわび強余いじや時代ちやうをけ本意ほんいと失うひ傍そば地ちのみより  
かる弘こう法ぽうあり。今いま附つの念ねん仏ぶつはく地獄じやく入いる。されずハ昔むかしの悪あくを  
唐たうの善ぜん守しゆけけ状じやうとてある也。今いま念ねん佛ぶつ者しやと。あまを師しと  
守しゆ師しよんせしむ。たふ本ほん間かんとの事こと也。このいまあハ彼か行ぎやう  
状じやうあり。あまをけ十八じはつ社しゃ。謝しゃ美み運うんと風ふうきのみひあり也。一  
念ねんも念ねんふれと念ねんて。これ除のぞくも。今いま附つのズアあ申まうしの夜や  
念ねんふ念ねんふたが。謝しゃ美み運うんが爪つめ先さきにも。乃なぶつこや。傍そば史しをえり。  
善ぜん守しゆ師しハ浄じやう土どの二に社しゃ也。三さん万まん部ぶのあまうて書か写しやし。は稱くわん乃  
念ねん仏ぶつ十じゆ万まん遍べんを。毎まい日にちの百ひやく作さくと志しあり。乃なりこもを吐はく。身みハ半はん  
金こん色しきよ。愛あいしむ事こと書か也。は終しゆう行ぎやうけ目めより見み終しゆう也。今いま附つの

欠あひ念ねん佛ぶつ。買かい求きゆうの万まん日にちを。ハ。今いま本ほん間かんとの事こと也。是こゝ念ねん佛ぶつ  
乃な惡あく口くちはわび。善ぜん佛ぶつれ秘ひ号ごうと。はる。錢せん儲たくわの種くさねと。これハ。  
善ぜん守しゆ師しの正せい道だうよ。と。い。く。薬やく弘こう毒どく。用もちして何なにの益えきあり。人ひと参まゐり  
人ひとを治ちやうす。薬やく。窮きゆう也。用もちけ。人ひとと教しやくす。念ねん佛ぶつ人ひと  
と。教しやくす。用もちけ。わ。く。地ち獄じやく入いり。何なにの教しやくあり。あ。う。ハ。日にち蓮れん師しの  
念ねん佛ぶつ。今いま本ほん間かんの。あ。ま。を。師しと。善ぜん守しゆ師し。さ。び。は。然ぜん上じやう人にんの。點てん鼓こあり。ま。  
ま。と。善ぜん守しゆ師し。あ。ま。を。師しと。善ぜん守しゆ師し。さ。び。は。然ぜん上じやう人にんの。點てん鼓こあり。ま。  
風ふうを。ハ。口くちの。と。迷まよへ。脱だつせ。だ。怒どり。字じ守しゆ。泥でい達だつ磨ま  
大師だいしれ。照せう存ぜん。天てん魔ま。事こと必ひつせり。真しん言げんの。亡むしやう國こく。亦また同どう也。  
六む大だい無む早そう四し曼まん相さう即じやく阿あ字じの。一いつ刀たう。身み生せい死しも。切きり堅けんと。切きりす。

るしづべし。昔も毒の用也。法獲の秘は却て此國に。東  
果師弘法師もむとて。律も志るなり。及宣付師。經法和  
尚。いふも今國の律に國賊と見ゆべし。其間の業も。ぬやに  
念仏。夫魔もぬやに。度福。此國もぬやに。其言。弘法師に。  
國賊もぬやに。律を守り。いづれ。正法。ゆて。善哉。入ざんや。  
善哉。入て。後。日蓮師を。惡に。いひ。めと。あつら。ふ。今。此。時。て。い。日  
蓮師の。由。む。千。方。極。入。今。の。法。花。宗。も。十。界。皆。成。の。妙。法。法  
は。實。相。乃。後。を。我。執。難。慢。の。も。落。入。て。安。樂。即。寂。光。乃  
本。理。よ。叶。せ。ど。お。多。し。く。日。蓮。師。の。法。眼。より。見。給。や。此。國。を  
向。の。名。言。や。け。ま。ら。ぶ。き。清。信。乃。行。者。終。く。之。ま。し。あ。く。凡。嗜。欲

おき。め。の。心。直。り。つ。正。法。を。し。げ。ぬ。わ。り。後。あ。れ。ば。な。し。け。し。新。む。仏  
乃。糞。雜。衣。を。ま。つ。物。は。は。く。あ。し。い。我。身。を。持。た。す。而。人。教。回。が。水。と  
の。も。け。胎。ま。ら。う。も。後。を。ま。て。い。さ。だ。よ。も。成。の。む。也。神。乃。之。持。乃  
佛。供。茅。ぶ。さ。け。敵。ゆ。り。も。を。う。げ。ひ。び。ら。の。後。は。う。後。を。て。事。ハ  
た。く。を。れ。ば。必。ど。許。ら。ぬ。難。い。と。す。か。及。ぶ。あ。る。を。け。る。か。との。法。教  
なる。也。ま。ら。れ。ば。愁。さ。る。の。後。は。逃。て。衣。を。畢。し。り。か。ら。と。ま。ら。ぬ  
く。り。の。の。貪。ま。ら。ぬ。恨。ぶ。ま。ふ。富。貴。を。祈。ひ。又。孔。門。は。つ。つ。る。人  
乃。祿。を。し。き。が。り。高。れ。つ。と。さ。の。ぞ。み。神。乃。氏。人。け。れ。ら。う。て。お。ぶ  
け。ら。わ。る。い。ひ。ら。と。う。て。天。理。よ。う。る。い。へ。ま。と。い。ふ。お。れ。ど。佛。法。の。こ  
世。を。ま。て。欲。乃。う。ら。ぬ。の。の。地。獄。に。落。る。終。り。の。の。極。も。は。性

やとゆべまふ佛の口ま仙とら坊まが。今の世は金泥のくそいぢ  
が持ねとくぬ世欲は地がれ九情はひんれ。愚人は耳目しぢぢ  
ねまして。仏州の沙法を捨て。飛とかざる今日のつらへ。已も悪る  
み落る。人を地獄よ地守ねへ。上未善控下化衆生欠てハ。  
何事と教へ何事も秘がぞ。去のよくて他力の奉教よわりて。  
いよく悪をばらむ。首途乃報をよるよとて。佛をそ  
り他をたると。惠眼くくは眼まいつり。いつら四眼融入一  
佛眼よるん。あき海くくねく  
此書。生佛土の持よるん。墮地獄の因かねべー

